

子供の自己決定，自己発揮を促す教師の支援や姿勢 —主体的な学びを実現する子供のイメージを視点とする考察—

藤松 康之 高度教職開発コース 教育課題探究プログラム

キーワード：主体的な学び 教師の支援や姿勢 学習リーダー 自主学习

1. 問題の所在と研究の目的

教師になってすぐのころ。先輩教師のクラスを見てみると、子供たちが「大造じいさんとガン」の授業の中で教師が指示を出すのではなく、情景描写について自分の考えを語り合い、聞き合っている場面を見た。それは筆者の理想としているような自ら動き学ぼうとしている子供たちであった。まさに平野(1994)がいう「何かを知ろうとし、わかろうとし、できるようになろうとしている」「能動的学習者」である。そんな先輩教師のクラスを見た筆者は大きな憧れをもち、そんな学級づくりをしたいと感じていた。しかし、現実には、同じ国語の授業であっても筆者の意図とは違う話し合いになった時に、止めてしまったり、またクラスでイベントを企画する際にも筆者の思った通りにまとめたりしようとしていた。子供と共にクラスをどうしていきたいのか、どうありたいのかを考えていきたいのに、「子供にどうしてほしいのか、どうあってほしいのか」という教師の考えを優先した指示が多くなってしまっていた。そうした教師の姿勢により、子供たちは当然指示待ちになるだけでなく、自己決定、自己発揮ができなくなり、学級での様々なトラブルにもつながっていった。

振り返ってみるとこのようなトラブルの背景には「教師の指示は必要であり、子供は指示を受けて動く」といった自身の子供観から生まれた問題があったと考えられる。そこで本研究では、平野(1994)が示す「何かを知ろうとし、わかろうとし、できるようになろうとしている」「能動的学習者」という子供観に立った上で、主体的な学びの具現のため、自己決定、自己発揮を促す実践を試み、そこから見えてきた教師の支援や姿勢を考察することを目的とした。

2. 研究の方法とその実践

2.1 研究の方法

本研究では、長野県教育委員会(2019)が「主体的な学びを実現する子供の姿」のイメージにおいて示す子供の姿(「興味や関心を高める」「見通しを持つ」「自分と結び付ける」「粘り強く取り組む」「振り返って次へつなげる」)を視点として、子供の自己決定、自己発揮を促す実践を試行する。それを振り返るとともに教師側だけでなく、子供側からも考察ができるよう 2.2 以降に示される「学習リーダー実践」並びに「自主学习実践」について実

際に学んでいる子供たち自身が主体的な学びを実現する子供の姿のイメージを視点に振り返る。その際子供がどのように感じているのかについてアンケート調査を行い、それらから見えた結果についても考察する。

2.2 方法の具体（実践）

(1) 学習リーダー実践

筆者は子供の自己決定、自己発揮を促すために「学習リーダー」という方法を算数の授業において取り入れることにした。子供同士で学びの見通し（問題→めあて→見通し→追究→まとめ）を共有して、子供が司会進行し、自分たちで授業を進めていくというものである。子供たちは最初こそ戸惑っていたが、算数における学びの見通しが共有されると、自分たちで授業を進めていくようになった。

E 児は、学習リーダーの授業が進むにつれ、様子がわかり、さらに自らも何回も学習リーダーを務める中で、友達の発言に対するメモを自分で書いたり、さらに、難しい問題は友達に聞きながらあきらめずに取り組もうとしたりする姿が見られるようになってきた。

「主体的な学びを実現する子供の姿」のイメージにおいて示す姿についてのアンケート調査（4年生クラス 35 名に実施）では、学習リーダーについて今までの授業（すべて教師が前に立って行う授業）に比べ「興味関心」「見通し」「自分と結び付ける」「粘り強く取り組む」「振り返って次につなげる」のどの項目についても 7 割以上の児童が「とても高まった」もしくは「高まった」と回答していた。

(2) 自主学習実践

自主学習は、自分が疑問に思ったこと、調べてみたいことをめあてとして行い、行ってきたことすべてが肯定されるものであり、自らのこだわりそれ自体が友達への異なった視点の提示になる。様々なことに興味がある一人一人の子供が自分の好きな生き物、食べ物、工作など様々な方面でアンテナを伸ばすことができる。また、自らの好きを自ら出すことができ、さらにお互いを認め合うこともできる。さらに、Google Classroom への投稿への返信や、直接友達と見合うことで、まとめ方や視点を参考にし、次回につなげることができる。

K 児は、自主学習で自分が行った美術館についてのまとめてきたものを「先生、自学（自主学習）やって来たんだ」と嬉しそうに見せてきた。そこで、その自主学習を Google Classroom にアップしたり、学級通信で紹介したり、さらに自主学習を見合う時間を確保したりすることで、家庭やそのほかの友達とつなげるということを行った。そうしたところ、友達から肯定的なコメントが多く寄せられ、K 児は、「わー、みんなが感想を書いてくれている。また書こうかな」と嬉しそうな様子がみられた。K 児に限らず、やってきた自主学習を紹介したり、友達同士で見合ったりすることを何度も続けていったところ、自分の興味をもったことについての自主学習がより盛んに行われるようになるとともに通常の教科学習の内容についても、その中で自分が興味をもったことを調べ、まとめてくる姿が見られるようになった。K 児は学習の振り返りの中で、「自分で自主学習で授業に関係あ

ることを調べたりして授業を受けるととっても楽しく授業ができます」と記し、以前よりも主体的に学習に臨んでいる姿が見られた。

「主体的な学びを実現する子供の姿」のイメージにおいて示す姿についてのアンケート調査（4年生クラス 35 名に実施）では、自主学習について今までの学習（課されている課題）に比べ「興味関心」「見通し」「自分と結び付ける」「粘り強く取り組む」「振り返って次につながる」のどの項目についても 8 割以上の児童が「とても高まった」もしくは「高まった」と回答した。

3. 研究から見え てきたこと

3.1 学習リーダー 及び自主学習にお けるアンケート結 果から示唆される こと

今回 2.2(1)(2)内
で示したアンケー

トには記述欄も設けた。記述欄の文章を AI 要約にて要約し、選択アンケートと共にまとめた。そうしたところ、2つの実践を振り返った子どもたちは図 1 に示されるように「みんな」「友達」等、クラスの友達に目をむけ、その友達の姿から学んだり、自分のこれからの姿を考えたりしていることが分かってきた。また、友達に支えられているという感覚が大きいことから、自らも友達に協力をしていきたいという願いも見えてきた。

3.2 学習リーダー及び自主学習における教師の支援と見出された姿勢

2.2 における 2つの実践を振り返った際、図 2 のような支援及び、教師の姿勢が見えてきた。「何かを知ろうとし、わかろうとし、できるようになろうとしている」「能動的学習者」という子供観に立って実践したことで普段無意識に教師のペースで進めようと話をする自分自身が立ち止まり、さらに、言葉の解釈についてもそのままの子供の言葉を大切にしようと考えて支援を行おうとしていることが見えてきた。それは言い換えれば「「させたい」ではなく、子供の学びのペースを大切にしていきたい」という姿勢であるともいえる。さらに、子供たちの授業中のノート、自主学習の成果物等を他の友達の目に触れるようにする支援をすることで「自ら学ぼうとする子供たちをつなげていきたい」という姿勢がみ

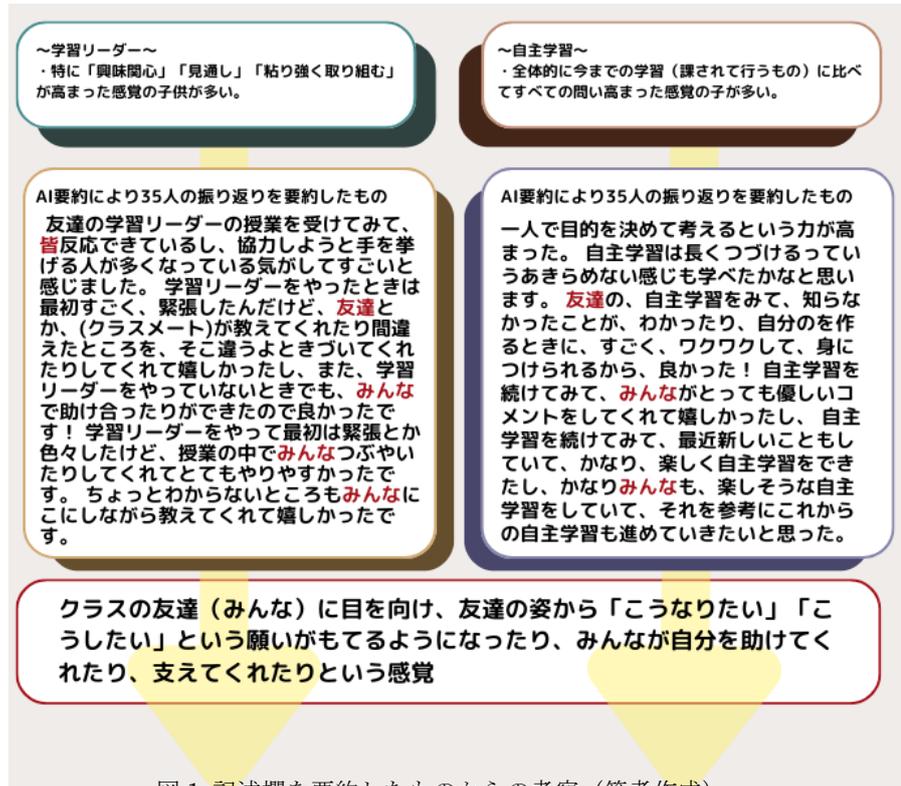


図 1 記述欄を要約したものからの考察（筆者作成）

えてきた。

4. まとめ

今回の2つの実践から2つの姿勢「自ら学ぼうとする子供たちをつなげていきたいという姿勢」「〇〇させたい」ではなく、子供の学びのペースを大切にしたいという教師の姿勢が見えてきた。つまり、「子供に足りないものを与える者としての教師」ではなく、

「子供同士をつなげる、子供と共に歩むものとしての教師」ということである。

ベースに「何かを知ろうとし、わかろうとし、できるようになろうとしている」「能動的学習者」という子供観、そして今回見えてきた「教師は子供たち同士をつなげていく存在である」「〇〇させたい」ではなく、子供の学びのペースを大切にしたいという教師の姿勢があり、そこにさらに学習リーダー実践や、自主学習実践がのっていくことにより、より子供たちの自己決定、自己発揮が促され、主体的な学びにつながっていく。

手法としての学習リーダー、自主学習では決してなく、自らの子供観、教師観の具現であるということを自覚しながら実践をすることは、自らが教師を続けていくうえで大切なものを得た感覚があった。

今回見えてきたほかにも教師の姿勢というものは存在する。新たなもの、今回見出したものも含めて子供たちとの実践の中で常に自己更新できるよう学び続ける姿勢をもって臨んでいきたい。

文 献

- 1) 平野朝久 (1994) . 『はじめに子どもありき—教育実践の基本—』学芸図書株式会社
- 2) 長野県教育委員会 (2019) . 『信州教育の学びの基盤』信教印刷株式会社

